

4. 刊行物、主催会議等

気象研究所の研究成果は、気象庁の業務に活用されるほか、研究所の刊行物、研究成果発表会などを通じて社会に還元している。

また、関連する学会や学会誌などで発表することにより、科学技術の発展に貢献している。

4. 1. 刊行物

気象研究所研究報告 (Papers in Meteorology and Geophysics)

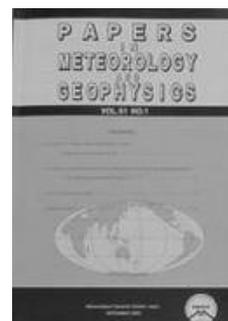
研究成果の学術的な公表を目的とした論文誌 (ISSN 0031-126X)。

気象研究所職員及びその共同研究者による原著論文、短報及び総論(レビュー)を掲載している。平成17年度からは、独立行政法人科学技術振興機構が運営する科学技術情報発信・流通総合システム”J-STAGE”に登録し、オンライン発行とした。

J-STAGE URL: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mripapers>

なお、第65巻をもって冊子での発行は終了し、オンライン発行のみとなった。

令和3年度は次の論文を掲載した。



第70巻

- ・ 西宮隆仁, 勝間田明男: スロー型津波地震に対する気象庁マグニチュードの評価

気象研究所技術報告 (Technical Reports of the Meteorological Research Institute)

研究を行うなかで開発された実験方法や観測手法などの技術的内容や研究の結果として得られた資料などを著作物としてまとめることを目的とした刊行物 (ISSN 0386-4049)。気象研究所ホームページで閲覧することができる。

URL: https://www.mri-jma.go.jp/Publish/Technical/index_jp.html

なお、第72号をもって冊子での発行は終了し、オンライン発行のみとなった。

令和3年度は第85、86号を発刊した。



第85号「旅客機搭載型の自動大気採取装置 (ASE) の開発—経緯と技術的要件—」

(松枝秀和 (気候・環境研究部)、近藤直人 (ジャムコ社)、工藤明弘 (日本アンス社)、坪井一寛 (気候・環境研究部))

第86号「遠地津波の観測データに基づく経験的な減衰予測手法」

(山本 剛靖)

4. 2. 発表会・主催会議等

気象研究所研究成果発表会

気象研究所の研究成果を広く一般に紹介し、社会的評価を高めることを目的とした発表会で毎年1回

開催している。令和3年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、令和3年12月12日に、気象研究所ホームページに以下の報告題目動画を掲載し、オンライン開催した。

【報告題目】

- ・地球温暖化研究と歩んだ気象研究所地球システムモデル開発 40 年
報告者：行本誠史（気候・環境研究部 研究官）
- ・高解像度気候モデルによる地球温暖化予測
報告者：水田 亮（気候・環境研究部 主任研究官）
- ・地球システムモデルで探る火山噴火の気候と生態系への影響
報告者：小畑 淳（応用気象研究部 室長）
- ・地球システムモデルを用いた黄砂の長期変化等について
報告者：眞木貴史（全球大気海洋研究部 室長）

第3回環境研究機関連絡会研究交流セミナー

気象研究所を含む13の環境研究に携わる国立試験研究機関、国立大学法人及び国立研究開発法人が参加する「環境研究機関連絡会」が主催する研究交流セミナー（平成15年度～平成30年度までは環境研究シンポジウムを実施）で、参加する研究機関が成果の発表を行っている。令和3年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、11月10日（水）にWebセミナーが開催され、気象研究所は以下の発表を行った。

【口頭発表】

口頭発表テーマ：「防災・減災（パンデミックを含む）関連研究」

発表名：令和2年7月豪雨の線状降水帯の特徴

発表者：廣川康隆（台風・災害気象研究部 主任研究官）

【総合討論】

総合討論テーマ：「防災・減災のための技術・情報をどのように社会に実装する（活かす）か？」

話題提供：豪雨・台風関連研究による防災気象情報改善への貢献事例について

発表者：永戸久喜（気象研究所 研究調整官）